

3. 先端酵素学研究所

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 9)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 10)

分析項目 I 研究活動の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

〔優れた点〕

- 全国共同利用・共同研究拠点として酵素学研究の場を全国の研究者に提供しており、共同利用・共同研究の採択課題数は、平成 28 年度の 60 件（国際共同研究 5 件）から平成 29 年度の 67 件（国際共同研究 7 件）、平成 30 年度の 145 件（国際共同研究 12 件）へ増加している。また、これらの共同利用・共同研究には年平均約 3,000 名（延べ人数）が参加している。毎年度国際シンポジウムを開催するなど、共同研究の成果を発信している。
- 平成 28 年度に徳島大学発ベンチャー認定制度が制定されたことに前後し、すでに 4 社のベンチャーを設立し、地域の新規産業の創出に貢献している。特に、ゲノム編集動物を作製するベンチャー企業については、設立後すぐに、徳島ニュービジネス支援賞大賞 2017、第 5 回イノベーションリーダーズサミット（ILS 2017） Top 100 STARTUPS、とくしま創生アワード 2017 グランプリ、未来共創イノベーションネットワーク三菱総研賞をはじめとする多くの受賞に示されるように国内外から高い注目を受け、その後も平成 30 年度戦略的基盤技術高度化支援事業採択、第 13 回ニッポン新事業創出大賞優秀賞（公益社団法人日本ニュービジネス協議会連合会主催）を受賞するなど精力的な活動を続けている。

〔特色ある点〕

- 平成 28 年度に、前身となる「疾患酵素学センター」と「疾患プロテオゲノム研究センター」を発展的に統合し、「藤井節郎記念医科学センター」、「糖尿病臨床・研究開発センター」を附属施設として置く研究所として再編を行い、全国共同利用・共同研究拠点認定を受けている。
- 研究所外の視点に立った客観的評価の実質化を図るため、平成 31 年 3 月に学外の国際的研究者からなる先端酵素学研究所運営協議会を開催した。慢性炎症研究を重点化し、研究部門を再編した点、教員（分野）の評価について、客観的評価軸を設定した点が高く評価された。
一方で、異動・退職者の補充、若手研究者招聘等による、研究力強化が求められた。そこで、この指摘を踏まえ、常勤ポスト等人事の業績の評価項目、評価基

準を全学に先駆けて定めた。また、2研究室（教授2、准教授2、助教2）の公募に活用し、特に若手研究者の招聘に努めている。

- 平成24年度～平成28年度 新学術領域研究「免疫四次元空間ダイナミクス」（高濱洋介：免疫系発生学分野）に引き続き、平成28年度～令和2年度 新学術領域研究「ネオ・セルフの生成・機能・構造」（松本満：免疫病態学分野）、平成29年度～令和3年度「性スペクトラム-連続する表現型としての雌雄」（立花誠：エピゲノム動態学分野）の2領域が新たに発足して、研究所の研究者が領域代表として異分野連携や共同研究、人材育成等を図る大規模グループ研究を推進し、学術コミュニティに貢献している。さらに、平成29年度～令和3年度 新学術領域研究「細胞機能を司るオルガネラ・ゾーンの解読」の計画班員（代表）に齊藤達哉教授が、また、平成30年度～令和4年度 新学術領域研究「シンギュラリティ生物学」の計画班員（代表）に岡崎拓教授が参画し、本研究領域の発展に貢献している。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 高い質にある

〔判断理由〕

学術的に卓越している研究業績、社会・経済・文化的に卓越している研究業績が、それぞれ、4件、1件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、高い質にあると判断した。

特に、「癌免疫の標的分子 PD-1 の作用機序の解明」と「胸腺細胞分化と自己免疫疾患制御機構の解明」は、学術的に卓越している研究業績である。